

『今月の天候と農作業』

通巻第5672号
2月号
令和5年1月26日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

なし。

【予報のポイント】

向こう1か月の気温はほぼ平年並ですが、1週目は寒気の影響を受けやすいため平年並か低いでしょう。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	40	30	30
降水量	九州南部	40	30	30
日照時間	九州南部	30	30	40

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<1週目の予報> 1月28日(土)～ 2月3日(金)

高気圧に覆われて晴れる日もありますが、気圧の谷や湿った空気および寒気の影響で雲が広がりやすく、期間のはじめに雨または雪の降る所があるでしょう。

<2週目の予報> 2月4日(土)～ 2月10日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<3週目から4週目の予報> 2月11日(土)～ 2月24日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報

(<https://www.jma.go.jp/bosai/forecast/>)を参照してください。

普通作物

◆早期水稲

1 スクミリンゴガイ対策

スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）対策では、厳寒期の耕うんが効果的です。発生ほ場では、トラクターの走行速度を遅くし、ロータリーの回転数を早くすると、殺貝効果が高まります。

2 播種と出芽

浸種は発芽揃いを良くするために水温が10℃の場合は10日間、15℃の場合は7日間程度を目安に行います。10℃以下の低温を避け、夜間の冷え込みにも注意します。浸種後、催芽を30℃～32℃で24時間行います。

播種量の目安は、稚苗では1箱当たり催芽粃180g程度です。

3 緑化と硬化

出芽後は、寒冷紗等で本葉1葉目が展開し、2葉目が抽出するころまで遮光します。温度は昼間が25℃以下、夜間は15℃以上で管理しましょう。

硬化では、前半は温度が昼間は20℃以下、夜間は10℃以上で管理し、後半は外気にならします。かん水は床土温度を下げないように午前中に行いましょう。

◆ムギ類

1 穂肥

平年は早いところで、月末には幼穂形成期を迎えます。小麦では2月中旬に10a当たり窒素成分で2.5kg、加里で2kg程度を施肥します。

2 土入れと排水対策

土入れは肥料の流亡防止、雑草抑制や防寒効果があるため、節間伸長期前までに行います。排水対策として、ほ場の周囲や条間を作溝します。

（福川 泰陽）

葉茎根菜類・いも類

◆共通事項

これから播種や植付けを行う品目では、発芽や活着を促すために、地温と土壤水分の確保が重要です。土壤を片手で握り、団子状態になる程度の土壤水分を目安にします。また、土壤水分を適度にすることで、土壤消毒剤（くん蒸剤や粒剤）や除草剤の効果が高まります。

◆食用かんしょ

来月にかけて、トンネル栽培の挿苗時期です。徒長を防ぎ、充実した苗に仕上げるため、採苗10日前頃から育苗ハウス内の苗は外気温に慣らしながら管理します。

地際部の茎が黒変したり芋が腐敗するサツマイモ基腐病が発生しています。育苗床からほ場に病気を持ち込まないため、育苗床では発病株の早期抜根及び持ち出しを徹底します。苗を切り取る高さは地際から5cm以上離し、切り取った苗は病害防止のため薬剤消毒をします。なお、薬剤の効果を安

定させるため、処理する当日に調整した薬液を使用します。

苗は適湿・適温を保ちながら数日間取り置きすることで挿苗後の活着が良くなります。定植予定のほ場は、十分な地温確保（18℃以上）のため、前日からトンネルを密閉します。

◆さといも

早生品種の植付け時期です。連作障害が出やすいため最低4年はさといもを栽培していないほ場を選び、センチュウ対策として土壌消毒を行います。種いもは病虫害や芽つぶれ等のない健全なものを選び、大きき順（30～50g程度）に揃え、種いも表面の土壌を洗浄し、水に浮く種いもは廃棄した上で、センチュウや乾腐病予防の薬剤消毒を行って植付けます。

（川崎 佳栄）

果樹

1 常緑果樹

◆完熟きんかん

完熟きんかんの出荷が最盛期を迎えます。厳寒期を過ぎると気温が徐々に高くなり、過熟やうみ果の発生が懸念されます。ハウス内の温度は昼間は10～15℃を保ち、夜間は凍害に遭わないように管理します。完熟果実は、打ち身や圧迫による傷害を受けやすいため、過度の積み重ねを避けるなど、丁寧に扱います。

◆マンゴー

早期出荷作型では、摘果の時期です。果実の縦長が5cm程度になったら、最終的に結果枝2～3本に対して1果となるように調整します。また、厳寒期を過ぎると、夜間の外気温が徐々に高くなるため、あざ果の発生に注意が必要です。早朝や日の出後に果実結露が生じないように、ヒートポンプの除湿設定やこまめな早朝換気により湿度を低く保ちましょう。

後期出荷作型はこれから開花期を迎えます。夜間の十分な加温や早朝換気を行うことで湿度を低く保ち、花の時期から軸腐病などの発生をしっかりと抑えます。花穂をひもでつり上げ、風通しを良くすることも重要なポイントです。灰色かび病に対する微生物殺菌剤の活用も有効です。

2 果樹全般

◆有機質の投入と土壌改良

果樹栽培において高品質・高収量を実現するためには、土壌の通気性の確保が重要です。完熟たい肥や稲ワラなどの有機物を施用し、土壌の通気性の改善を行います。

土壌の酸性化は肥料の吸収や根の生育を阻害して、樹勢低下を招きます。土壌分析を行い、必要に応じて石灰質資材で調整します。

（鈴木 美里）

花 き

◆電照ギク

2～3月出荷作型は最も暖房コストがかかるため、それぞれの品種・系統に適した変夜温管理を行い、コスト削減に努めます。

また、ハウス内の湿度が高くなると白さび病が発生しやすくなるため、換気除湿や循環扇の活用、農薬の予防的散布などの対策を行います。

◆スイートピー

日長が長くなると、蒸散量や養分要求量が増加するため、かん水及び施肥を適切に行い、草勢低下を防ぎましょう。

また、花シミの発生が増加する時期となります。花シミの発生要因は大半が水滴の付着であるため、循環扇の活用や換気除湿等により結露防止に努めます。

◆ホオズキ

地下茎の植え付けを開始する時期です。

病害虫をほ場に持ち込まないために、健全な地下茎の選別・調整をしっかりと行います。また、必要に応じて植え付け前に地下茎の消毒を行います。

◆トルコギキョウ

天候不順時には、ブラスチングやチップバーンが発生しやすくなります。

生育後半の過剰施肥を控えるとともに、不要な枝や蕾の整理、カルシウム剤の葉面散布等により発生軽減を図ります。

◆ラナンキュラス

収穫量が徐々に増加してくるため、草勢低下防止のための液肥を定期的に施用します。

また、ハウス内温度が低すぎると、光合成量が減少し、収量に影響しますので、日中の温度管理は15℃程度を目安にします。

(山塚 裕美)

畜産

◆家畜防疫対策

今シーズンの鳥インフルエンザは、異例のペースで各地に感染拡大しており、国内での発生事例数が過去最多となり、県内でも発生が確認されています。また、野鳥からもウイルスが確認されており、野鳥が営巣地に帰る4、5月までは、農場への侵入リスクが高い状況が続くため、防鳥ネットに破れ等がないか点検を強化し、破れがあれば速やかに補修をしてください。

その他の家畜伝染病についても、ウイルスが伝染しやすい気象条件にあるため、農場にウイルスを侵入させないように、畜舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物等の侵入防止対策等の飼養衛生管理基準を遵守しましょう。

◆家畜

先月同様、寒さが厳しく、乾燥する時期になります。

特に、幼畜は、寒さや温度変化に弱いため、適切な温度管理と換気を行きましょう。

乾燥により埃や塵が多くなるため、呼吸器病対策のために、細霧器等を使用して湿度を適度に保ち、畜舎内が乾燥しすぎないように留意しましょう。また、畜舎内の温度維持のためカーテン等で舎内を閉め切ることが多くなりアンモニアガスが溜まりやすくなります。換気扇等の活用によりこまめに換気を行きましょう。

幼畜の寝床は常に清潔な状態に保ち、風が体に直接当たらないようコンパネ等で風を防止するとともに、コルツヒーター等の保温器具を活用し、防寒対策をしましょう。

◆飼料作物

イタリアンライグラスやエンバクの生育期になります。翌月から収穫作業等が始まるため、飼養管理に影響がでないよう計画的な作業に向けて収穫機械等の点検を行きましょう。

(藤井 真理)

特用作物

◆ 茶

1 春肥の施用

春肥は、一番茶を始め二・三番茶の収量及び品質向上のために重要な肥料で、2月上旬頃から、2～3回に分けて施用するとより効果的です。肥料の種類や散布量は地区の基準に準じ、畦間全面に幅広く散布します。施用後は根を傷めない程度に軽く混和しましょう。樹勢の低下が見られるほ場では、春整枝後に液肥を3回程度散布すると樹勢回復に効果があります。

2 春整枝の実施

春整枝の時期は平均気温10℃が目安です。平坦地では2月中旬から、山間地では3月上～中旬頃実施しますが、一番茶摘採期が集中するのを避けるため、品種の早晩生や地域の微気象等を考慮し整枝時期を調整しましょう。その際は、整枝直後に急激な低温に当たらないよう天気予報に注意してください。

整枝の高さは、葉層を8cm以上確保した上で、最終摘採位置から3～5cm高い位置が目安ですが、秋整枝を実施した茶園では、一番茶となる芽にかからない高さで丁寧に整枝しましょう。

また、萌芽15日前からは防霜対策が必要となります。計画的に防霜ファンやスプリンクラーの点検・整備を行うなど、対策に万全を期してください。

3 カンザワハダニの防除

カンザワハダニの防除適期は、産卵を開始する気温10℃となる2月下旬～3月上旬頃です。

地区の暦に準じ、裾部や葉裏へ薬液が十分にかかるよう散布します。散布前までに、春整枝と裾刈りを済ませておくことで防除効果が高まります。

(竹田 博文)

◆しいたけ

1 植菌と仮伏せ

植菌は、暖かくなると害菌の繁殖も強力となるため、遅くとも3月中旬までには終わらせます。

仮伏せは植菌した種駒の乾燥を防ぎ、初期活着を促進する作業です。菌糸の活着・伸長に必要な温度と湿度を保つ必要があります。本県では、地際から50～60cm以下の高さに横積みする方法が多く使われています。ほだ木の周囲を笠木や遮光ネット等で直射日光や風が当たらないように被覆し、上面は雨が良く通り、かつ日陰が出来るようにして保温・保湿を図ります。

2 寒子づくり

袋掛けやビニール被覆を行い、良質なしいたけの生産に努めます。

3 採取

発生したしいたけは、目標の品柄に応じて若干早めに採取するなど、品質の向上に努めます。特にほだ木の表面を傷めないように、かつヒダに触れないよう丁寧に採取します。

採取後は速やかに乾燥し、湿気が入らないようにポリ袋などで密封し、箱に入れて冷暗所で貯蔵します。

(堀川 和也)

◆たばこ

今月は、子床管理と施肥畦立が主な作業となります。苗の良否が本畑植付以降の生育に大きく影響しますので、健苗育成に努めましょう。

1 子床の管理

苗床肥土は、排水・通気性・水もちが良く、病害虫が発生しない、良質な肥土を使用しましょう。

仮植は、葉数5枚苗（米粒大までの葉数）で、根張りの良い苗を植えましょう。かん水のポイントは、活着までは床面が乾かない程度にかん水を行い、活着後は、夕方床面が少し乾く程度にかん水をやや控えめにして、病害発生や根腐れ防止を図りましょう。また、苗床が高温多湿にならないよう温湿度調整（管理温度は20～25℃）を行いましょう。

本畑植付10日前ぐらいからは、苗の根張りを促進するために、換気とかん水制限をして順化处理を行いましょう。

2 畦立・被覆

畦立は、ねり畦防止のため、土壌水分に注意して行ないましょう。また、根張り促進のための地積確保と、排水対策も含めて30cm以上の高畦にしましょう。

被覆は、早作早進のため透明マルチを原則とし、黄斑えそ病対策等必要に応じてシルバーマルチを活用しましょう。

3 農薬の適正使用

春消毒や苗床での農薬使用は、使用基準に則って最善の注意を払いながら行いましょう。

(宮崎県たばこ耕作組合)

内容の詳細について

2月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。
(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設果菜類	病害虫全般	—	向こう1ヶ月の気温は、九州南部では平年より低く、特に前半はかなり低くなる予報となっています（鹿児島地方気象台1月20日発表）。多重・多層被覆で換気が悪い場合には、病害の発生が助長される傾向があるので適宜換気をする等施設内の温湿度管理に注意します。いずれの病害虫も、多発してからでは防除効果が劣るので、発生初期の防除を徹底します。
冬春きゅうり	べと病 うどんこ病 灰色かび病 褐斑病	並 並 並 並	うどんこ病は乾燥した条件下で、その他の病気は多湿条件下で発生しやすいので、適正な温度・水管理に努めます。 いずれの病害も、多発してからは防除が困難となるため、発生初期の防除を徹底します。
	ミナミキイロアザミウマ	やや多	ミナミキイロアザミウマの発生が多くなっています。発生初期に防除するとともに、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、最低でも7日間隔で3回の連続した防除を行います。
	タバココナジラミ	やや多	タバココナジラミの発生が多くなっています。タバココナジラミは、退緑黄化ウイルス（CCYV）を媒介するので、特に改植する場合は、次作に持ち込まないように注意します。
	病害虫全般 (改植時の留意点)	—	ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、前作のきゅうりを抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後は可能な限り20日間以上蒸し込みます。 また、改植時には粒剤や灌注剤等による防除を行います。
冬春ピーマン	斑点病 うどんこ病	やや多 並	斑点病は多湿条件、うどんこ病は乾燥条件で発生しやすいので、ハウス内の適正な温湿度管理、排水対策等を徹底します。
	ミナミキイロアザミウマ ヒラズハナアザミウマ ※ タバココナジラミ	並 多 多	ヒラズハナアザミウマは、主に花の中に生息していますので、薬剤防除は、薬液が花の中にしっかり付着するように行います。多発時は複数回の連続防除が必要です。 タバココナジラミの発生が多くなっています。今後、気温の上昇とともに活動が活発になるため、低密度のうちに防除を徹底します。
冬春トマト	葉かび病 すすかび病 灰色かび病 疫病 うどんこ病	並 並 並 並 多	うどんこ病の発生が多くなっています。上位葉への進展が見られるなど病徴の激しいほ場においては、1回散布では防除効果が現れにくいことがあるので、1週間間隔で2回以上の防除を実施します。 その他の病害は、多湿条件下で発生しやすいので、施設内が多湿にならないようハウスの換気に努めます。
	タバココナジラミ トマト黄化葉巻 病（TYLCV）	多 並	TYLCVを媒介するタバココナジラミは、今後、気温の上昇とともに活動が活発になるため、低密度のうちに防除を徹底します。また、発病株は伝染源になるため、根ごと抜き取り、適切に処理します。
冬春いちご	うどんこ病	並	うどんこ病は、多発すると防除効果が低くなるので予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発生初期の防除を徹底します。
	ハダニ類	並	ハダニ類は、寄生数が増加してからの防除は難しくなるので、低密度時に防除を徹底します。また、複数の殺ダニ剤に抵抗性をもつ個体群が確認されているので、天敵や物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込みます。
	コナジラミ類 ヒラズハナアザミウマ	並 多	オンシツコナジラミは、今後、気温の上昇とともに活動が活発になるため、低密度のうちに防除を徹底します。 ヒラズハナアザミウマの発生が多くなっています。果実への加害は、例年3～4月以降に顕著に認められますが、低密度のうちから青色粘着板による誘殺などの防除対策を講じましょう。
1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるかを予測したものです。※は病害虫防除情報を発表していますので、ホームページをご覧ください。 2) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、 http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki です。			